

イエール大学所蔵『手鑑帖』所収、極札「源俊頼朝臣ねかはくは」の一葉について

和田 幸 大

はじめに

人間文化研究機構の、日本関連在外資料調査研究事業の一環として東京大学史料編纂所に委託された「イエール大学をはじめとする米国大学所蔵日本関連資料の再活用による日本研究の推進（研究代表者・近藤成一氏）の調査（二〇一一年一〇月二日～九日、米国・イエール大学）に同行した。

この調査において、イエール大学所蔵『手鑑帖』所収の、極札「源俊頼朝臣ねかはくは」が付された一葉（口絵）に注目した。（以下、本稿ではこの一葉を「イエール大学所蔵切」と称す）

極札とは、古筆鑑定の際に書く短冊形の紙片である。「古筆見」と呼ばれた古筆鑑定家が、推定した筆者と書き出しの和歌や語句を数文字抄出し、鑑定者の極印を捺したものである。

今日、この極札に記された推定筆者は、不確定要素が高いことが知られている。古筆が書写された年代と推定筆者の生存年代に隔たりがある事が少なくない。また、書写年代に整合性はあっても、書写者に同時代の高名な人物をあてるなど、書写年代と書写者との関係、および双方ともに疑問を懐かざるを得ないものも多い。

「イエール大学所蔵切」に付された極札の推定筆者、伝・源俊頼筆とされる古筆に、『三宝絵詞』を書写した「東大寺切」がある。

「イエール大学所蔵切」は、唐紙の料紙に界線を引き、その枠中に散文を書写するという、古筆切では多く見られない形式である。その特徴から、おそらく極札が示す推定筆者のとおり、伝・源俊頼筆の「東大寺切」の一つではないかと推測し、現地にて調査を行った。そして、二〇一一年一〇月七日、イエール大学バイネキ稀覯本・手稿図書館でのワークショップにおいて、「イエール大学所蔵切」は「東大寺切」の一つであるとの内容を報告をした。

帰国後、先行研究の調査により、新出の史料ではないことが判明したが、本稿では、この一葉が「東大寺切」の一つであると判断した経緯を示し、古筆の同定に関する考察としてまとめたものである。また、調査の過程で分かった事実から発展的考察も加えた。

なお、「東大寺切」の名称の由来や、推定筆者・源俊頼の人物像、および誰により書写されたかについては、本稿の主旨と直接関わりが無いため割愛する。

一 イェール大学における調査内容

「イェール大学所蔵切」について、調査の結果と特徴は次のとおりである。

①料紙の寸法

縦241cm×横154cm

②行数・文字数

文字が書写された行は七行。一行につき一七〜一九文字が書き入れられている。

③界線について

文字が書写された七行分の枠線は、縦207cm×横上辺129cm、下辺133cm。一行の幅は、18cm〜19.5cm。薄い墨色で引かれている。上辺および下辺の界線が、右側の本紙の端（ノド）まで延伸しているのが特徴的である。

④料紙について

具引きの紙に雲母で型文様を刷り出した唐紙⁽³⁾である。色調は白系。傷みはげしく、表層の剥落が進み、地の紙まで見えている箇所があった。墨線は、唐紙の表面の胡粉・雲母層に載っているだけなので、このような箇所では文字が読みにくい。特に左下部の剥落が進んでいた。

⑤文字の線について

文字の大きさに対し筆への含墨量が多いため、概して太くぼつてりとした線である。特に墨継ぎ箇所での線の太さは顕著である。

⑥文字の連綿について

二字・三字連綿がほとんどで、極端な文字の変形も見られず比較的読みやすい。四字連綿は数箇所のみである。

⑦重ね書きおよび脱字の書入れ、補筆等

書写時の書き誤りに気付き、重ね書きをしたと思われる箇所が三箇所。重ね書き後に、読みやすいよう傍に正字を書き添えたのが一箇所。脱字付近に小字を書き添えたのが一箇所であった。また、本文書写者と別の手で、おそらく後世料紙表面が剥落した際、消えかかった書線に補筆したと思われる箇所が数箇所確認された。後述するが、三行目下部に特に明らかな箇所があった。

⑧本文⁽⁴⁾

ねかはくは大王我らをひかしまてわかこのしぬらんとおころにつかはせおなし所にしてかはねとならんといふ王ふかくかなしひて、つからふたりのおやのてをとりてひきてそのところのいたりぬち、はこのあしをいたきは、はこのかしらをいたきておのくひとつのでをもちてともにむねのやをひく

二 『三宝絵詞』について

『三宝絵詞』は、源為憲（？〜一〇一一）が、永観二年（九八四）十一月に、尊子内親王（九六六〜九八五）のために書き著した仏教入門書である。

上・中・下巻からなり、上巻は六波羅蜜の教えや釈迦の今生譚（前世における修行を説くもの）を、中巻は聖徳太子・大和国女人ら十八人の僧俗の徳行や逸話を列挙し、下巻では月々に行われる各種法会の起原・作法を叙述し、寺院の縁起・僧侶の伝記を説く。上巻は仏法、中巻は法宝、下巻は僧法、合わせて三宝という。

序や注記から、成立当初は「絵」と「詞」が存在したと考えられるが、「絵」は伝存せず「絵」と「詞」の関係（形式）は不明である。

「イェール大学所蔵切」の本文は、漢字を数文字使用しただけで仮名主体の表記であるが、次に示す『三宝絵詞』上巻（第十三、施無）⁽⁵⁾の棒線部（筆者による）に該当することから、『三宝絵詞』を写したことがわかる。

：「一人の子すでに死にけり。今は誰をかたのみむ。定めてかならず死なむ。願はくは大王われを引かして、わが子の死ぬる所に遣はせ。同じ所にして尸とならむ」と云ふに、王深く悲しびて手づから二人の親の手を取りて引きて、その所に率て至りぬ。父は子の足を懐き、母は頭を懐きて、おのおの一手をもちてともに胸の筋をひく。母また舌をもちて、：

『三宝絵詞』には、次の三種の伝本が知られる。⁽⁶⁾

【Ⅰ】「前田家本」（前田尊経閣文庫蔵）

【Ⅱ】「東寺観智院本」（東京国立博物館蔵）

【Ⅲ】「東大寺切」（名古屋博物館蔵ほか諸所に分蔵）

【Ⅰ】は、祖本（醍醐寺旧蔵、現在所在不明）から正徳五年（一七一五）に書写されたもので、難読な漢文体で書かれている。

【Ⅱ】は、文永十年（一二七三）の奥書を持ち、漢字に片仮名を交えた文体で読み易い。ほぼ完本に近い形で残っている。

【Ⅲ】は、『三宝絵詞』成立当初の姿に近いとされ、もとは粘葉本の形態で製本された。⁽⁸⁾源俊頼の書写と伝えられ、仮名に漢字を交えた優美な筆跡である。古筆愛好の風潮が昂まるにつれ分断され、多くが散佚している。名古屋市の関戸家に、中巻の大部分と下巻の一部を残す零本一冊（全八十六丁、綴葉装）が伝わり、現在、名古屋博物館の所蔵となっている（以下、この零本一冊を「名博本」と称す）。この「名博本」の末尾には、保安元年（一一二〇）の奥書があり、重要文化財に指定されている。もとの装丁（粘葉本）から解体ののち仕立て直され、広義には

「名博本」も「東大寺切」の一つと解釈できるが、便宜上これより本稿では、「名博本」と別に存在する断簡を「東大寺切」と呼ぶことにする。「東大寺切」は、諸家・諸美術館等に点在しており、一〇〇葉を超える切が確認されているが、原本を復元できるまでの分量はまだ見つからない。なお、もひとつの本であったこの「東大寺切」および「名博本」全体を指す特定の名称はない。

神崎充晴氏は、この【Ⅲ】について、「書写年代を明らかにする数少ない古筆として、とくにわが国書道史上、基準となるべき一等資料として、その価値ははかり知れない。」「ともあれ「東大寺切」の存在は、書道史、国文学史、国語学史、文化史、仏教史の各分野に大きな意義を持つものである。」⁽¹⁰⁾と、高く評価している。

三 「イェール大学所蔵切」と「東大寺切」の比較

「東大寺切」のもとの形態は、粘葉本であったと知られている。料紙を縦二つ折りにして積み重ね、一紙ずつ折り目近くを糊で貼り合せる製本である。

今日確認されている「東大寺切」は、図1・2・3のように、界線が引かれ、その中に本文が七行書写されたものが多くを占める。図4のように、界線の上辺・下辺が、左右どちらか片側のノドまで延伸し、未書写の半行が存在する。これは図5のように、半折前の一紙面で十五行になるよう界線で区切り、中央にあたる第八行目は粘葉本の折り目または糊代となるため書写しなかったと理解できる。そして、今日確認された「東大寺切」の多くが七行に書写されている事実からも、粘葉本の背にあたる付近で後世裁断されたであろうことを物語っている。

「東大寺切」の料紙は、三種の型文様が確認されている。表紙に白の具引きを施し、①花菱唐草文(図1) ②亀甲文(図2) ③七宝文(図3)

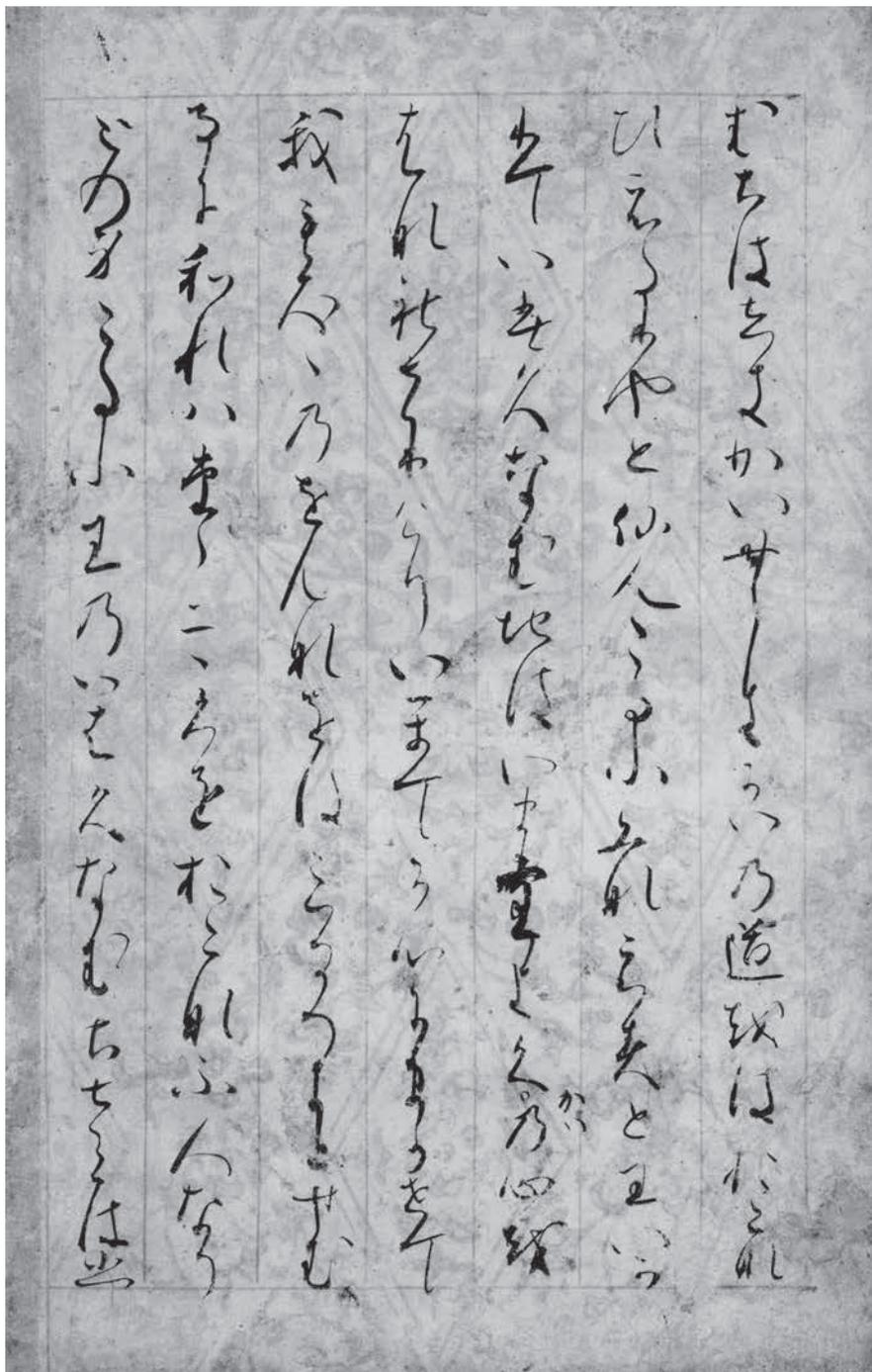
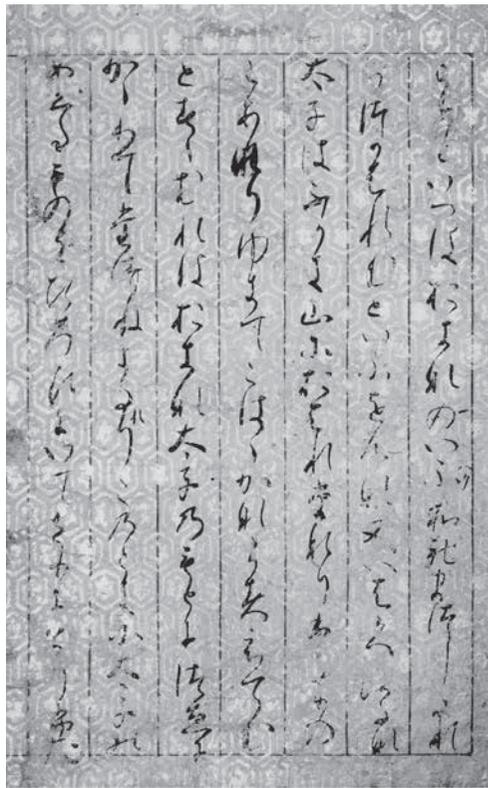


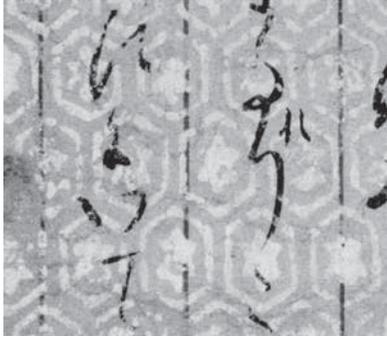
図1 「東大寺切」(料紙文様:花菱唐草文)

個人蔵
(['日本名跡叢刊91』(1985年/二玄社) 27頁より転載)

図2 「東大寺切」(料紙文様:亀甲文)

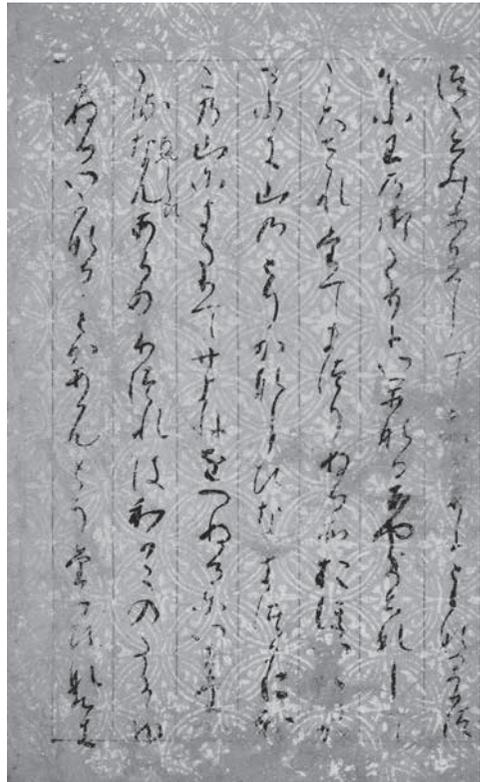


部分拡大 (亀甲文)

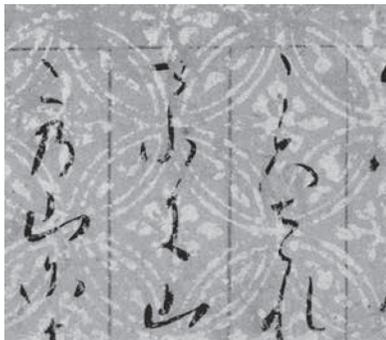


根津美術館蔵
『日本名跡叢刊91』(1985年/二玄社)
31頁より転載)

図3 「東大寺切」(料紙文様:七宝文)



部分拡大 (七宝文)



根津美術館蔵
『日本名跡叢刊91』(1985年/二玄社)
34頁より転載)

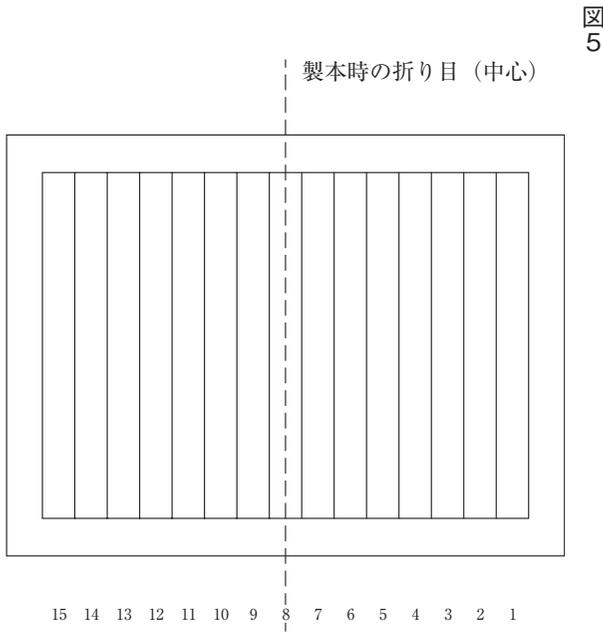
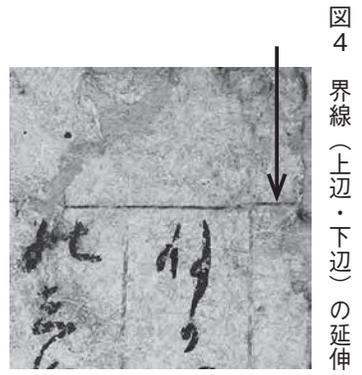


図5



口絵 右上部の拡大

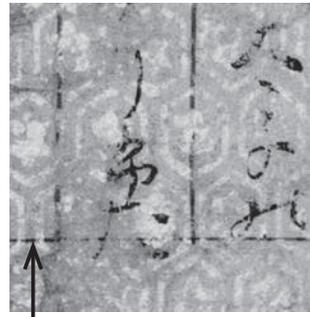


図2 左下部の拡大

を雲母刷りした和製唐紙である。「イエール大学所蔵切」(口絵)も①と同様の料紙であり、型文様は花菱唐草文であることが分かる。重ね書きおよび脱字の書入れ等については、多くの先行研究でも指摘され、「東大寺切」においても同様に多数確認ができた⁽¹⁴⁾。次に、筆跡の点で、特徴的で類似するものを取り上げ、比較検討を試みることにする。図6～12は、「イエール大学所蔵切」および「東大寺切」図1～3までの、該当する文字を切り出したものである。

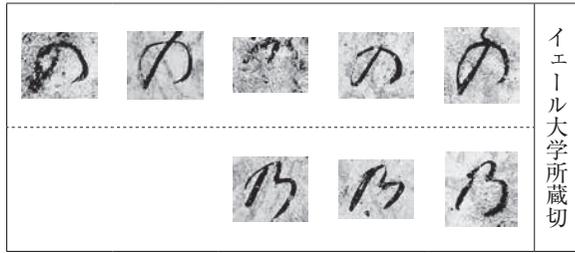
図6「我」では、五画目の斜線が、二画目と交差せず、四画目に近い位置で書き始められている。漢字の「我」は比較的使用頻度が高く、掲載図版以外の「東大寺切」においてもこの特徴がよく見られる。

図7は、「つ(徒)」「か(可)」の二文字の組み合わせの例であるが、「つ」の最終画に注目したい。この最終画は湾曲させ右下方向に延ばすことが多い

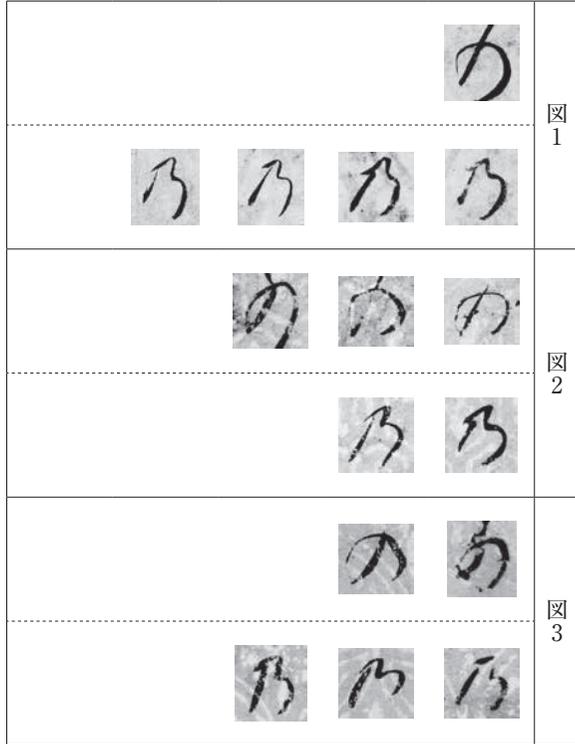


(41) イエール大学所蔵『手鑑帖』所収、極札「源俊頼朝臣ねかはくは」の一葉について (和田)

図8



が、ここでは終筆をゆるやか且つあいまいにし、次の文字「か」へ続くよう意識して書かれている。これは、左下方向へはたらく連筆のリズムがそうさせたのであり、書写者の個性があらわれた箇所と認められる。「イエール大学所蔵切」と「東大寺切」では、同じ字母を持つ仮名でも、平仮名と草仮名を同時に表記しているのが特徴的である。図8は、各切に書写された全ての「の」の文字である。言うまでもなく「の」の字母は「乃」であるが、同じ字母を持つ仮名でも、その中間の書き方は見あたらず、意識的に二種類の書き分けをしているように見える。しかも、それぞれの使用率はさほど変わらないようで、何かしらの視覚的効果を考えたのではないかと想像される。同様に図9は、「に(尔)」の文字



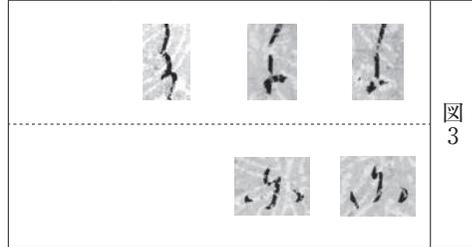
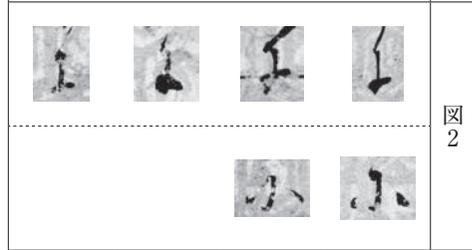
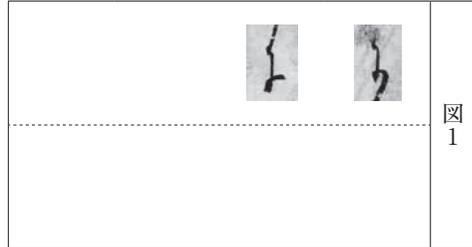
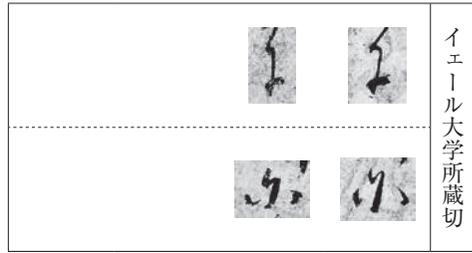
に、同じく「か」と「な」の連綿をもつ箇所があった。図10「とかなかりつ」がそうである。「か(可)」前後の線を見ると、線は太いが下に延びる単なる長い連綿線に見えなくもない。「か(可)」の文字が非常にコンパクトに書かれた為である。第一章でも触れたが、「イエール大学所蔵切」は全体的に墨量が多く、たつぷりとした太い線であることも考慮すると、この箇所の補筆は、細い線で且つ稚拙ではあるが、もとの書き振りから大きく外れてはいないだろうと推測できるのである。よってこの箇所を、筆者は「くかなし」と読めるだろうと判断した。書線について、文字を単なる線の集合体という観点で線を分解してみた時、「イエール大学所蔵切」では縦線の角度が、右側に倒れたものが

である。総じて草仮名では、連綿せず単体で書いているのに対し、終筆を小さく回転させより省略させた書きぶりでは、その多くが前後の文字と連綿している。文字を続け書きする意識が省略を生んだと判断できる例であろう。

第一章で、料紙表面が剥落した状態で補筆をしたと思われる箇所があると述べた。図10の「くかなし」がそうである。この箇所の補筆は、「く」から「な(那)」へそのまま一本の線で連綿したように見え、「くかなし」とは読めない。そのまま「くなし」と読んだとしても「く」と「な」の字間が空きすぎ、筆跡上違和感がある。ただ、本文の上では他の伝本と照らし合わせても、どうしても「くかなし」と読むのが自然な箇所である。この連綿がある「イエール大学所蔵切」と本文

の上で非常に近い図3(後述表2の、切Cに該当

図9



多く、垂直ぎみの線は比較的少ない。また、横線や文字の傾きもやや右上がり強く感じるため、文字が傾いて見える。図11では、その特徴が分かりやすいよう、界線も含めて切り出した。この傾向は、図12の各「東大寺切」でも同様である。線の指向性は、書写者の運筆の勢いや書写態勢により大きく影響される。総じて図13の傾向が強く、筆尾が右向こうに倒れぎみの執筆であったらうと推測をした。

さらに、「書線」の太さに注目してみたい。「イエール大学所蔵切」(口絵)と図3は、線が太く、連綿以外の箇所は筆意が途切れがちに見えるのに対し、図1は、筆先が利いた細いしなやかな線が多く見つけられる。書写されたこの料紙は胡粉や雲母が引かれ、その粒子により素紙や染紙と比較すると、運筆に抵抗のある筆触となる。極端な表現をすれば、目の細かいサンドペーパーの上に文字を書く抵抗に近い。そのため、獣毛

図1

図2

図3

で作られた毛筆は、素紙や染紙よりも筆先の擦り切れが早くなる。筆先が擦り切れた筆は細い線が書きにくくなり、「書線」が割れないよう、筆先をできるだけ利かして書写するため、必然と筆へ墨を多く含ませなくてはならない。

おそらく図1は、筆を使い始めて比較的新しい状態で書写され、「イエール大学所蔵切」およびその本文の上で近い図3は、擦り切れが進んだ同じ筆により、含墨量の多い状態で書写されたと思われる⁽¹⁸⁾。

以上、「イエール大学所蔵切」と「東大寺切」との比較をおこなったが、類似点が多く、矛盾も認められないことから、「イエール大学所蔵切」は「東大寺切」の一つであると判断するに至った。

また、この比較により、製本前の料紙、書写者の運筆や使用文字の個性、連綿のし方からの本文の読み、筆記具の状態などの推測もできたのである。

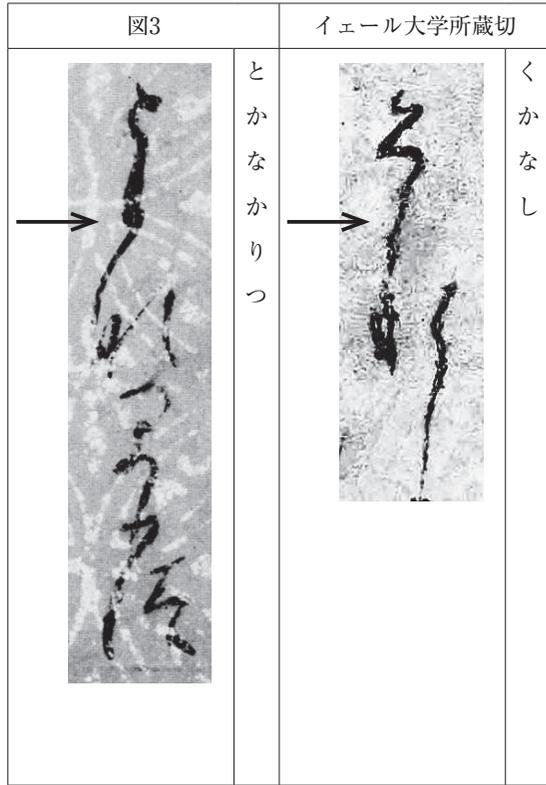
四 「名博本」の料紙から、一元の粘葉本を考える

粘葉本において、二つ折りした料紙の見開き部分にのみ書写することを、内面書写という。この場合、糊代のある頁(折り目外側)は空白のままとなり、写本とすれば紙面に余裕がある贅沢な本となる。「東大寺切」と「名博本」が製本された当初の粘葉本は、内面書写だったのか、それとも折り目外側にまで書写されていたのかを考察してみたい。

ここで粘葉本がどのような冊子本であるか、今一度確認しておくことにする。

(43) イエール大学所蔵『手鑑帖』所収、極札「源俊頼朝臣ねかはくは」の一葉について (和田)

図10



粘葉本は図14を見て分かるように、一枚の料紙を二つ折りにする事から、丁が二丁できることになる。折り目内側の頁は図5のように、一枚の料紙全面を見開くことができるが、折り目外側の見開きは糊代の分だけ紙面が狭くなる。

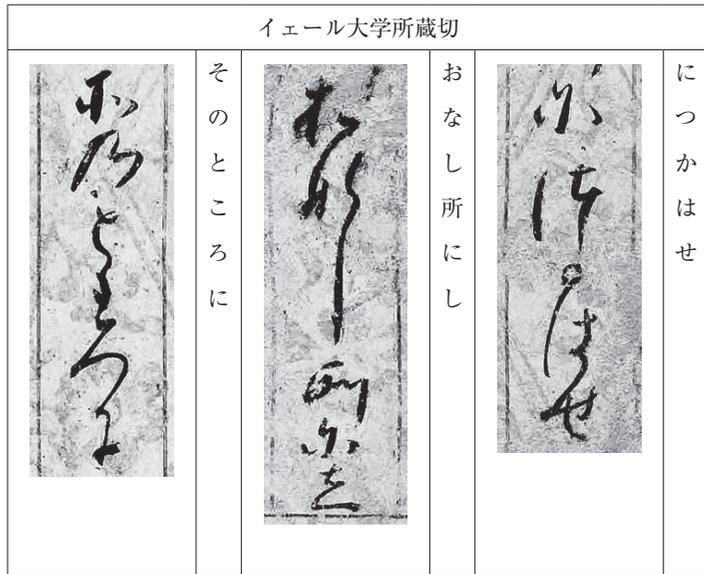
保安元年に書写された『三宝絵詞』において、まとまった紙数をもつ「名博本」では、次にあげる論考において詳細な研究報告がされ、今回筆者は、製本当初の姿を知る上で大きな益を受けた。

●山本裕子・神山浩「『三宝絵』(保安元年書写本)の書誌と用字・書体について」(『名古屋博物館研究紀要』第十巻 昭和六十二年)

●『名古屋博物館蔵 三宝絵』(写真版)〈解説・翻刻版〉

(平成元年、名古屋博物館)

図11



前者の論考において山本裕子氏は、「名博本」本文の連続する部分で、製本当初の粘葉本における、料紙の並びを復元している。それによると、「名博本」の本文料紙の型文様の組合せは、次の二種に限定できるといふ。

- ①花菱唐草文と亀甲文が表裏をなすもの
- ②花菱唐草文と七宝文が表裏をなすもの

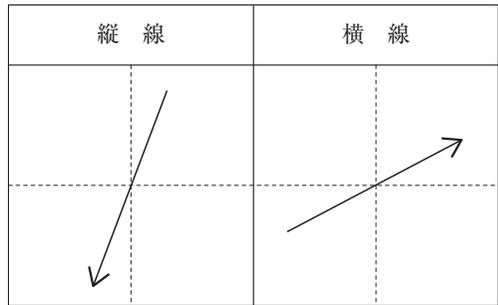
これは、製本時に料紙を二つ折りする前の、つまり料紙一枚で、①と②の原則を指している。分かりやすく図示すると、一枚の料紙を二つ折

図12



りにし下側面から見た場合、図15のように、料紙文様は a || d · b || c の配列が成り立つというのである。
 これらから、製本当初の粘葉本は、本文が折面外側にも、すなわち表裏両面に書写されていたことが分かる。また、型文様の組合せ①と②を図15に照らし合わせると、料紙の表裏および型文様の組み合わせは、表1となり、「名博本」における粘葉本への復元には四通りの料紙の使い方が考えられるのである。

図13



線の指向性

また、安田尚道氏は、「現存する断簡のほとんどすべては、一枚の料紙を表の面と裏の面の二枚に引きはがした上で、表装して掛軸に仕立てたり手鑑に貼り込んだりされている。」と述べている。つまり、「東大寺切」は「相剥ぎ」され、表裏で二面に分割されているというのである。古筆切として珍重されたことを考えれば、「相剥ぎ」説は宜なるかなと思われ、またそれを可能とする和製唐紙であることも考慮すると、この論には強く首肯できるのである。

以上から、糊で貼り合わせた頁の見開きは図16のように考えられ、今日確認されている、多くの七行に書写された「東大寺切」は、料紙一枚の1/4面に相当することになる。

表1

②		①		型文様の種類	折目外側	折目内側
4	3	2	1			
七宝文	花菱唐草文	亀甲文	花菱唐草文	a	折目外側	折目内側
七宝文	花菱唐草文	亀甲文	花菱唐草文	d		
花菱唐草文	七宝文	花菱唐草文	亀甲文	b	折目内側	折目外側
花菱唐草文	七宝文	花菱唐草文	亀甲文	c		

図14 粘葉本の製本

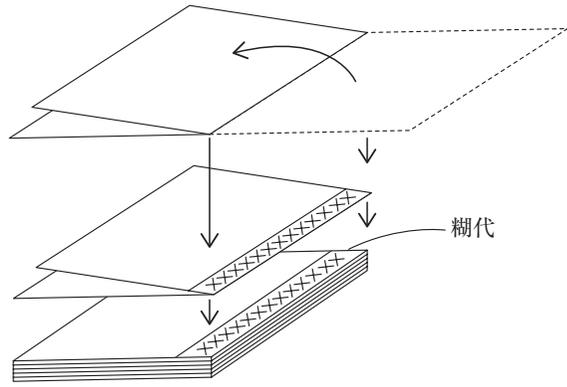


図15 料紙を二つ折りにし、下側面から見た図

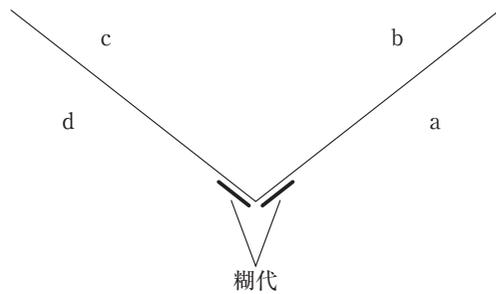
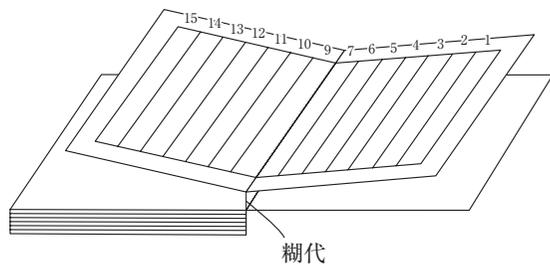


図16 糊で貼り合わせた頁の見開き



五 「イェール大学所蔵切」が書写された料紙について

ところで「イェール大学所蔵切」は、製本当初の粘葉本では、どの「切」と組んで一枚の料紙であったのだろうか。また、折目の内側と外側どちらに書写されていたのかを考察してみたい。

「イェール大学所蔵切」と本文の上で前後する「東大寺切」が今日確認されている。前述の三種の伝本による本文の対比を、「東大寺切」を中心に作成したものが表2である。本文は、『三宝絵詞』上巻（第十三、施無）の一場面に該当し、それぞれ右から順に連続している。

表中「東大寺切」の散佚部分は未発見のため、記述が不明である。こ

の散佚部分に該当する「東寺観智院本」「前田家本」本文は、切C・Eに挟まれた部分を書き入れた。切A～Fまでの両伝本と「東大寺切」との文章量を比較すると、この散佚部分はおそらく他の「切」と同様、七行で書写されたのではないかと推測されるのである。よって、ここではこの散佚部分を「切D」とする。

書籍の紙数を数える「丁」という語を用いれば、「イェール大学所蔵切（切E）」は当初の粘葉本において第何丁であったか不明だが、延伸している横界線を見れば、丁の「表」に該当することが分かる。図15で言えば、丁の「表」は、aもしくはcの面にあたる。これを二枚の料紙を用い、隣接する切との位置関係を図にあらわすと、図17のように二つ

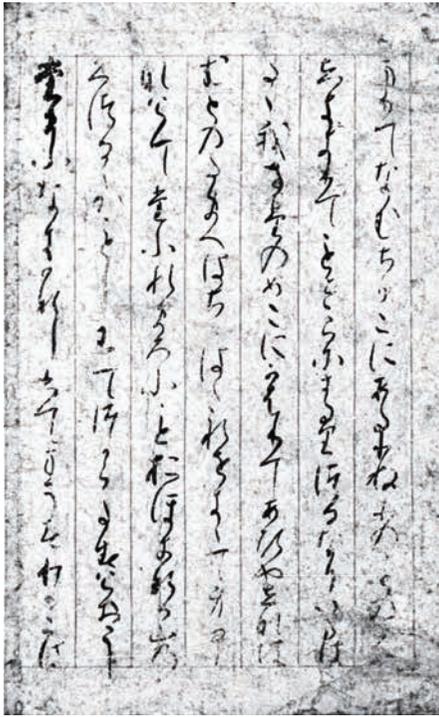
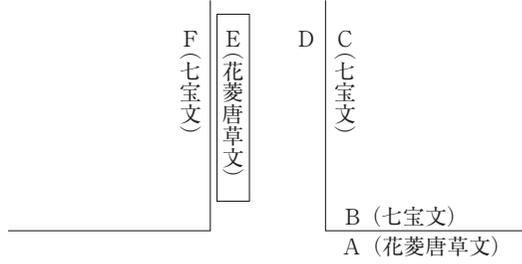


図18 「東大寺切」(切B)

日本学士院蔵

〈仮定1〉



〈仮定2〉

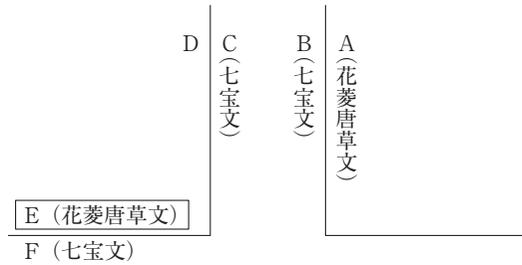


図17 隣接する切の位置関係 (下側面から見た図)

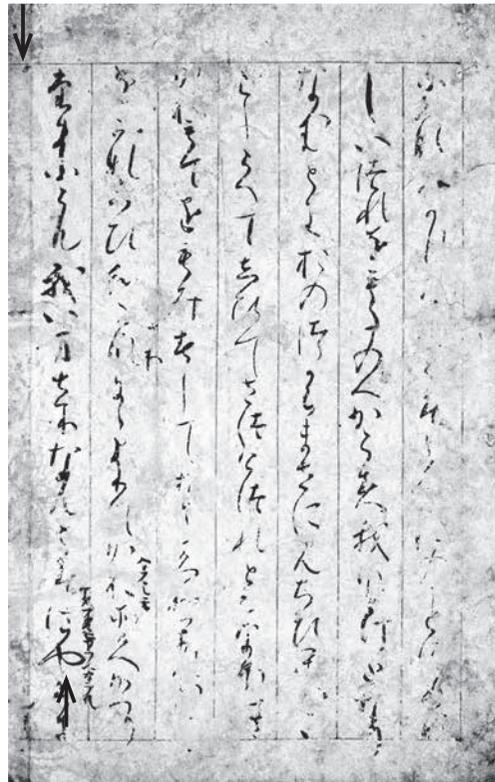


図19 「東大寺切」

左上部を部分拡大



個人蔵

(『日本名跡叢刊91』(1985年/二玄社)

33頁より転載)

(47) イェール大学所蔵『手鑑帖』所収、極札「源俊頼朝臣ねかはくは」の一葉について (和田)

表2 「イェール大学所蔵切」とその前後に該当する「東大寺切」

C	B	A	切	
図3	図18		本稿における図版	
根津美術館	日本学士院	出光美術館	所 蔵	
七 宝 文	七 宝 文	花菱唐草文	文 様 ※1	
不明 (ノド部分切断による)	有		折り目部分の糊の痕跡 ※2	
<p>きぬるいかなることかあらんとうたかひなけき るなんあらざりつればわかこのたに、ゆ この山にきたりて甘よねをへぬるにいまたか せふき山のとりかなしひなきつるに我 ころされたてまつりぬるそおほいなるか つ、しみふかくしてわかたぬにとかなかりつ けふ王の御ためにいかなるあやまちなして</p>	<p>たまふなきかなしひてまうすわかこは くつる、かことし王てつからたすけおこし なけてたふれまるふことおほきなる山の むとのたまへはち、は、これをき、て身を た、我をたのめこにかはりてあひやしなは まりてなむちかこにあたりぬそのことのかな しきニよりにことさらにきたりつるなりいまは</p>	<p>かことしわれ山にいりてしをいつるにあや おやのこをまつをみるに心いたきことさく なみたをなかつてのた□はく我 はかへりきぬらんとまうす王たへすして くひいつみをのむさらにともしきことなく 又くるしきことなしこの山のくたものきこ しめさせん我こいつみをくみにまかりぬいま</p>	<p>東 大 寺 切 ※3</p>	
<p>カ有ラムト疑ヒ悲ヒ 我カ子ノ谷ニ行キヌル若シ何ナル事 余年ヲ經ヌルニ加久阿良サリツレハ 泣キ悲ヒツルニ我レ此ノ山ニ来テ甘 リヌルソ大ナル風俄ニ吹キ山ノ鳥ノ 王ノ御爲ニ何ナル誤ヲ成シテ被殺奉 慎ミ深シテ我カ爲ニ咎カ无リツ今日</p>	<p>山ノ如類シ王手カラ助ケ起シ給フ泣 キ悲テ申ス吾カ子ハ ヲ聞テ身ヲ投テ倒フレ丸フ事大ナル 馮メ子ニ替テ養ハムト宣ヘハ父母此 キニ依テ故ラニ来ツル也今ハ只吾ヲ (誤)テ汝カ子ニ當ヌ其ノ事ノ悲シ</p>	<p>割シ吾レ山ニ入テ鹿ヲ射ツルニ (誤) ク吾レ親乃子ヲ待ヲ見ルニ痛キ事如 ラムト申ス王不堪シテ涙ヲ流シテ宣 子水ヲ汲ニ未加リヌ今ハ返り来リヌ キ事无シ此ノ山ノ菓子ミ聞食サム我 食ヒ泉ヲ飲ム更ニ乏シキ所无ク苦シ</p>	<p>東 大 寺 切 に対応する箇所 東 寺 観 智 院 本 前 田 家 本 ※4</p>	
<p>疑 餘年未有如此之怪我子行咎若何事</p>	<p>山類王自手扶起泣悲申我子 我代汝子養言給父母聞此投身倒轉如 (誤)中汝子其事、悲依来也今只馮</p>	<p>食菓飲泉更无不足又无苦此山菓令食 吾子汲水罷今歸来申王不堪流淚云吾 祖待子痛如割吾入山射鹿(誤)</p>	<p>慎深爲吾无咎今日爲王成何失被殺申 于時大風俄吹山鳥悲泣我等来此歷廿 廿</p>	

※1、切B・Eは、実見し確認した。その他の切は、次に示す図版により確認した。切A小松茂美著『古筆学大成』第二十五卷（一九九三年、講談社）、切C『日本名跡叢刊』91（一九八五年、二玄社）、切F『74日本書芸院展図録 特別展観・古筆名蹟』（一九七四年、日本書芸院）

※2、料紙表面の糊跡の有無は図版でもおおよその見当がつくが、確実を期すため、実見していない切は斜線にした。

※3、切Eは、本稿に記載の読み（筆者による）を記した。それ以外は、『諸本対照 三寶繪集成』小泉弘・高橋伸幸著（昭和五五年六月、笠間書院）によった。

※4、※3に同じく『諸本対照 三寶繪集成』による。これは、原本とおりの行字数（送り仮名も同様）で翻刻されている。しかし本表では、行送りに留意せず、「東大寺切」に対応する本文を抄出するのみにとどめた。二つの切にまたがる漢字は（ ）で記した。

F	E (イエール大学所蔵切)	D
個人蔵	イエール大学	
七宝文	花菱唐草文	
無	無	
<p>□ま□ひはく我こはけうしなり佛につかへ</p> <p>つりのりをたもちそうをゐやまひて</p>	<p>ねかしくは大王我らをひかしてわかのしぬらんところにつかはせおなし所にしてかはねとならんといふ王ふかくかなしひて、つからふたりのおやのてをとりてひきてそのとほろにいたりぬち、はこのあしをいたきは、はこのかしらをいたきておのくひとつのてをもちてともにむねのやをひく</p>	散佚部分
<p>母又舌ヲ以テ其ノ疵ヲ祢不利テ云ク毒ノ氣我カ口ニ入テ我ヲ殺シテ子ヲ生ケヨ我レハ年老目盲ヒニタリ必ス相ヒ替テ死ナムト云フ又父母音ヲ擧テ呼ヒ泣テ云我カ子ハ孝子也リ仏ニ仕リ法ヲ持チ僧ヲ敬マヒツ</p>	<p>願ハ大王我ヲ令引テ吾カ子ノ死ヌル所ニ遣ハセ同シ所ニシテ尸ト成ラムト云フニ王深ク悲テ手ツカラ二人ノ親ノ手ヲ取テ引テ其ノ所ニ將テ至ヌ父ハ子ノ足ヲ懷キ母ハ頭ヲ懷テ各一ツノ手ヲ以テ共ニ胸ノ箭ヲ引ク</p>	<p>ツルニ已ニ空シク去ニケリ幾ハクノ時ヲカ經ヌル死ヌルカ未タ不死ヌカト申セハ王具サニ子ノ云ツル事ヲ傳ヘテ加久云テナム死ヌルト宣マフ祖此ヲ聞ニ弥ヨ迷テ申サク一人ノ子已ニ死ケリ今ハ誰ヲカ憑マム定テ必ス死ム</p>
<p>母又以舌舐其疵云敬白三世佛願毒氣皆入我口殺吾殺吾生五子吾年老目盲必相替死云又父母揚聲叫云又我子孝子事佛持法敬僧</p>	<p>願大王令引我遣吾子死所於同處爲骸申王深悲手自取二人手引將至其所父懷子足母懷頭各以手引胸失</p>	<p>已不虛歷幾時死歎申王具子言辭傳如此云死言祖聞此弥迷申一子已死今馮誰定將死</p>

の仮定ができる。

前章で記述した、図15において a || d・b || c が成り立つ点を援用すると、どちらの仮定においても「切D」は、「切A」または「イエール大学所蔵切(切E)」と料紙文様が同じことになり、花菱唐草文であることが判明した。

両仮定のどちらであるかの判断基準に、粘葉本解体によって現れた、料紙折り目部分の糊の痕跡があげられる。「イエール大学所蔵切(切E)」では、本を見開いた際に生じたであろう縦長の折跡は確認できたが、糊跡は確認できなかった。また、図18²⁰⁾「切B」では、料紙表面の左端折り目部分に糊跡を確認することができた。

これにより、当初の粘葉本において「イエール大学所蔵切」は、図17の仮定2のように、「切C・D・E・F」とでも一枚の料紙であり、折目の内側に書写されていたことが分かった。そして、この料紙文様の組み合わせは表1でいうと、②-4であったことになる。

また、図19の糊跡を観察すると、粘葉本時の糊代内に界線が確認でき、製本する前に界線が引かれていたことが分かる。よって、粘葉本完成までたどった順は、次のとおりであったと考えられる。

- ① 料紙製作（和紙の表裏両面に具引きをし雲母刷りを施す）
 - ② 両面に界線を引く
 - ③ 料紙を二つ折りにし、粘葉本に製本する
- ところで、本文書写はいっ行われたのだろうか。仮に①と②の間としたら、本文書写後に界線を引いた事になり、界線を引くことの意味、また体裁よく界線内に文字が書写されている点を考えると、これには無理がある。よって、②と③の間、もしくは③以後の④となる。

粘葉本は、二つ折りの料紙を重ねて作るシンプルさから、製本される前、料紙一枚ごとに本文を書写し、全て書き終えてからの装丁が可能で

ある。また、製本後に本文の書写も可能である。どの過程で本文が書写されたかについては、今後考察を深めたい。

六 おわりに

以上、「イエール大学所蔵切」を調査し、「東大寺切」と比較検討した結果、矛盾なく「東大寺切」の一つと認識できることを顕かにした。そして、この「イエール大学所蔵切」の分析を契機とし、「東大寺切」「名博本」と先行研究を照らし合わせながら、いくつかの判明したこと、推論を発表することができた。

「東大寺切」は、過去に重要美術品に認定されていながらも、所蔵者の都合により、今日所在が不明となっているものも少なくない。

今後、一葉でも多く散佚した「東大寺切」が発見され、最も古いとされるこの『三宝絵詞』の全容が詳らかになることを願うばかりである。

〔注〕

(1) 『名古屋市博物館蔵 三宝絵』(解説・翻刻版)(平成元年、名古屋博物館)に、高橋伸幸氏による『三宝絵』(冊子本並に東大寺切) 残存一覽があり、十七頁の備考欄に「イエール大学古筆手鑑」の記載がある。

一九三四年に「日本イエール協会コレクション」が寄贈された際、同時に送られた英文の冊子目録(CATALOG)のAD1手鑑帖には、この一葉について次のような注釈がなされている。Mimamoto Toshiyori's autograph. A "Sanbo-e" fragment. This is one of the "celebrated autograph fragments", so called, or popularly known as "Todaaji fragment" and is highly valued among collectors.

また、朝河貫一博士が一九四五年に新たに作成した目録(GIFTS OF THE YALE ASSOCIATION OF JAPAN)では、5b.0手鑑帖における次の注釈を記している。To the right is a part of a prose composition

attributed to Minamoto Toshiyori, courtier-poet of the early 12th century. An extremely rare piece from the famous collection of autographs known as the "To-dai-ji fragments".

両英文の記述によると、日本から米国へ渡った当時から、「東大寺切」は貴重で価値あるものとして認識されていたことがわかる。

(2) 踊り字は字数に加えなかった。

(3) 同行した東京大学史料編纂所技術専門職員・村岡ゆかり氏と共に確認をした。

(4) 同行した東京大学史料編纂所准教授・松澤克行氏と共に確認をした。

(5) 江口孝夫校注『古典文庫64 三宝絵詞(上)』(一九八二年、現代思潮社)より抄出した。なお、この刊本では「東寺観智院本」が底本として用いられている。

(6) 『日本名跡叢刊』91(一九八五年、二玄社)解説による。三宝絵詞の伝本は、本稿であげた三種を指すことに変わりはないが、研究者によりその呼称は変わる。例えば「前田家本」では、「前田本」や「尊經閣本」という具合である。

(7) 山田孝雄著『三寶繪略注』(昭和二十六年、寶文館)四二三頁。および春日和男「草仮名による字音表記―三宝絵詞東大寺切の場合―」『文學研究』第五十八輯(昭和三十四年七月、九州大学文学部)三三三頁下段。

(8) 「東大寺切」は古くから、成立当時は粘葉本であったと多くの文献で記述されている。本稿でも取り上げた、山本裕子・神山浩「三寶絵」(保安元年書写本)の書誌と用字・書体について(『名古屋博物館研究紀要』第十巻(昭和六十二年三月)において、原装の復元が可能な根拠を示し、それを裏付ける報告がされている)。

(9) 高橋宏幸氏は、諸出版物および、未見である「入札目録」等への掲載を含めると、一〇九葉の「東大寺切」を確認している。「三寶絵」東大寺切翻字解釈三題』『都留文科大学研究紀要 第68集』(二〇〇八年三月)一五〇頁上段。

(10) 前掲注(6)。六七、六八頁。

(11) 前掲注(6)。六八頁。多くの先行研究で、「東大寺切」の料紙の文様

は本稿で述べた三種類としているが、小泉弘・高橋伸幸著『諸本対照三寶繪集成』(昭和五年、笠間書院)凡例に、「料紙は、白胡粉地に菱唐草・龜甲・七寶・芥子等々の模様を…」と「芥子」の文様について記述がある。また、安田尚道氏も同様に、「その模様には、菱唐草・七宝・龜甲・芥子などがある」と言及している。「三寶絵詞」東大寺切とその本文(一)『青山語文』第十一号(一九八一年)二四頁。安田氏は、文献や入札目録の図版をもとに判断されたことだが、この切の所在は現在不明で、実見による確認が難しい。今後の新たな発見と研究を待ちたい。

(12) 「名博本」の、遊紙に用いられた唐紙の文様は花菱唐草文であるが、後補のものと思われ、本文料紙の花菱唐草文とは文様が違っている。前掲注(8)の論考三頁上段。

(13) 小松茂美編『二玄社版 日本書道辞典』見出し(和製唐紙)によると、「舶載の中国北宋製唐紙に対して、その製法を模倣してわが国で作られた唐紙を総称している。紙質において、中国製が竹と考えられるのに対し、和製は楮質のため、加工がしやすく、雲母文様も細かく、鋭い。」とある。

(14) 前掲注(1)『名古屋博物館蔵 三寶絵(解説・翻刻版)』において、小泉弘氏による解説「本書における書き込みのことなど」に詳しい記述がある。

(15) 春日和男氏は、漢字はこの「我」の他に、「見」「思」「返」「事」「道」等が使用度が高いと述べている。「三寶絵詞東大寺切管見―主として關戸家冊子と觀智院本との比較による―」『國語國文』第二十七卷第十一號一〇七頁下段。

(16) 春日和男氏は「名博本」を翻刻する際、漢字体に近い草仮名を漢字で表記している。また、特殊な字母をもつ仮名も無く、簡易なだけだた書きぶりであるとも述べている。「三寶絵詞東大寺の研究―關戸家冊子の本文と用字―」九州大学文学部創立四十周年記念論文集(昭和四十一年)八一三、八六〇頁。

(17) 馬淵和夫氏は、平安時代の平仮名の字母で、実用的・一般的なものが「女手」、芸術的・特殊なものを「草仮名」という見解をしている。「三寶絵詞の草稿本、東大寺切・関戸本について」『説話』第9号(一九九一

年三月)

(18) 出雲路通次郎氏は『落葉集』(大正十四年、博文堂)解説において、当時、奈良県・玉井久次郎氏所蔵であったこの「イェール大学所蔵切」について、「禿筆」云々と述べている。

(19) 『三宝絵詞』東大寺切とその本文(一)、『青山語文』第十一号(一九一一年)二十六頁上段。また、前掲注(8)の論考三頁下段に、「本来の料紙の表裏をはがした上、後補の料紙と貼り合せるという手の込んだ改修がなされている」との記述もあり、「名博本」での「相剥ぎ」の事実が確認された。

(20) 現在、東京国立博物館に寄託となっており、二〇一三年十月熟覧の機会をいただいた。東京大学史料編纂所に、日本学士院所蔵『群鳥蹟』の採訪マイクロフィルムの架蔵があり、図版へはこれを利用した。

〔付記〕本稿をまとめるにあたり、東京大学史料編纂所・近藤成一教授にご教示を賜った。記して感謝の意を申し上げる。